平成 31 年 3 月 25 日 長 野 県 信 用 組 合 シンガポール駐在員事務所

ラッフルズ卿上陸から200年、節目を迎えるシンガポール

昨年は史上初の米朝会談の開催地となり世界中の注目を集めたシンガポール。今年は、「シンガポール建設の父」と呼ばれるトーマス・スタンフォード・ラッフルズ卿上陸から 200 年の節目を迎えます。

この節目の年を迎え、シンガポールでは1年を通じて様々なイベントや、ウェブサイト、SNS による情報発信が計画されている一方、現地では大きな転換期を迎えると展望する識者もいます。 今回は、ラッフルズ卿上陸から200年を迎えるシンガポールの現状や、2019年の展望をご紹介します。

【要旨】

- ▶ 今年は「シンガポール建設の父」ラッフルズ卿上陸から200年の節目の年。
- > ラッフルズ卿は、シンガポールの地理的重要性、優位性に着目し、無関税の自由港を建設して東南 アジアの貿易拠点としての地位を確立。当時の都市計画が現在のシンガポールでも垣間見られる。
- > ラッフルズ卿による自由貿易拠点戦略は、現在でも貿易立国を標榜するシンガポールの主要戦略の 一つ。
- ▶ 2018年の総貿易額(石油貿易含む)は、シンガポール企業庁の発表によると、伸びは鈍化傾向にあるものの前年比9%増の1兆1,000億8ドルとなり、4年ぶりに1兆8ドルの大台を突破。また、シンガポールの輸出の好不調を判断するのに使われる「非石油地場輸出(NODX)」は前年比4.2%増の1,821億8ドルとなりプラス伸長を維持。
- ⇒ また、シンガポール通産省の発表では、2018 年の同国の経済成長率は、対前年+3.2%と年初の予想を上回る結果に。ただし、今年の経済成長見通しについては、世界経済の先行きが不透明なことを受け、従来の予想レンジ(+1.5%~3.5%)の中間値をわずかに下回ると予想。
- ▶ 各種施策では、ラッフルズ卿上陸 200 年目にあたる今年、これまで培ってきた国家資源を戦略的に 活用しながら、より強靭で団結した国を目指す、と表明。
- ▶ 政治面ではラッフルズ卿上陸 200 年、与党・人民行動党 (PAP) が政権を掌握してから 60 年という節目の年を迎えることから、「総選挙の前倒し実施」の観測が高まっている。
- ▶ 現首相は、総選挙実施後、第4世代へ首相交代をする意向。政治面でも新たな動きが想定される。
- ▶ この「200 年」という節目を契機に今年以降、様々な変化も予想される。今後、どのような変化が あるのか注目。

1. ラッフルズ卿上陸とシンガポールの歩み

イギリス東インド会社の社員であったラッフルズ卿がシンガポールに上陸したのは、1819 年 1 月 28 日。当時は数百人の漁民が住む小さな寂れた村であったシンガポールですが、ラッフルズ卿は大陸部東南アジアと島嶼部東南アジア、かつインド洋と太平洋を結び、イギリス、インドと中国を結ぶ地理的重要性、優位性に着目して無関税の自由港を建設し、東南アジアの貿易拠点としての地位を確立しました。

また、貿易拠点としての地位を確立し貿易が盛んになるのと比例し、マレー人、中国人、インド人、イギリスをはじめとするヨーロッパ人等、多くの移民が集まり人口が急増。ラッフルズ卿は実用的な都市作りを行い、民族間紛争を避けるため民族別の居住区の設置(この街づくりは今となっては賛否両論あるようですが)、寺院や教会、モスクの建設や教育の普及にも力を入れています。この都市作り等は現在のシンガポールでも垣間見られ、今日の多民族国家シンガポールの礎となったことが窺い知れます。

その後のシンガポールはというと、ラッフルズ卿上陸を契機としてイギリス植民地となり、 その後、旧日本軍による占領、マレーシア連邦時代を経て1965年8月9日に独立。国家の生き 残りをかけ、いち早く外資誘致、外国人受け入れ等に注力し急速な経済成長を達成。現在の繁 栄に至っています。

2. 2019年の経済見通しと予算案、施策案

ラッフルズ卿による自由貿易拠点戦略は、 現在でも貿易立国を標榜するシンガポール の主要戦略の一つとなっています。

現在、シンガポールは上海に次ぐ世界第 2 位のコンテナ取扱量を誇っています。世界銀 行の直近統計によれば、同国の 2017 年の貿 易額は対 GDP 比 322.4%と外需依存度が高



貿易立国を標榜するシンガポール

い経済構造となっており、貿易はシンガポールの命運を握る要素の一つです。

シンガポール企業庁(Enterprise Singapore、以下 ESG) の発表によると、総貿易額(石油貿易含む)の伸びは鈍化傾向にあるものの、2018 年は前年比 9%増の 1 兆 1,000 億 S ドルとなり、4 年ぶりに 1 兆 S ドルの大台を突破しました。また、シンガポールの輸出の好不調を判断するのに使われる「非石油地場輸出(以下、NODX)※」は前年比 4.2%増の 1,821 億 S ドルとプラス伸長を維持しているものの、全体の 3 割を占める電子製品輸出がプラスからマイナスに転じたことで伸びが鈍化しました。 ESG は 2019 年の見通しを貿易総額、NODX ともに 0%~2.0%増としています。

また、シンガポール通産省(以下、MTI)の発表では、2018年の同国の経済成長率は製造業が牽引し(対前年+7.2%)、対前年+3.2%と年初の予想を上回る結果となりました。今年の経済成長見通しについて MTI は、シンガポールの主要貿易相手国(米国、ASEAN 諸国)の成長鈍化見込み、米中貿易摩擦や予想を上回る中国の経済成長鈍化、英国の EU 離脱等、世界経済の先行きが不透明なことを受け、従来の予想レンジ(+1.5%~3.5%)の中間値をわずかに下回る、としています。

更に今年 2 月 18 日には、ヘン・スイキャット財務相が 2019 年度の予算案及び各種施策を発表しました。2019 年予算は歳出拡大基調が続く中、赤字予算となっています(2018 年度は当初 6 億 \mathbf{S} ドルの赤字見込みから 21 億 $\mathbf{2}$,000 万 \mathbf{S} ドルの黒字となる見通し)。

各種施策では、ラッフルズ卿上陸 200 年目にあたる今年、これまで培ってきた国家資源を戦略的に活用しながら、より強靭で団結した国を目指すとし、シンガポールが力強い成長をするために重要な項目として「安全・安心」「経済変革」「包括的な社会作り」「国際都市としての地位向上」を挙げました。また、長期的な取り組みが必要な領域として、経済変革のほかに高齢化、ソーシャルモビリティー、不平等是正、気候変動対策等を挙げました。自動化・イノベー

ション創出等の経済変革による、競争力の高い企業や人材育成を通じた強い国作り政策に加え、低所得者や失業者、高齢者など社会的弱者にも手厚い支援策を打ち出しました。

※シンガポールの輸出 (Total Exports) のうち、荷を積み換えただけで輸出するものを再輸出 (Re-Exports) という。輸出から再輸出を引いたものが地場輸出 (Domestic Exports)。地場輸出から石油関連の輸出を引いたものが「非石油地場輸出」。

3. 国内政治動向

シンガポールは、独立前の 1959 年のイギリス自治領時代に初の普通選挙が実施されて以降、 人民行動党(以下、PAP)が与党として政権を担ってきました。リー・シェンロン首相は、昨年 末、毎年恒例の国民に向けた新年のメッセージの中で「2018 年は生産的な 1 年であった」と総 括する中で、自身の後継者選定で「重要な進展を遂げた」と、若手指導者グループがヘン・ス イキャット財務相を次期指導者に選んだことを取り上げ、「このことは、シンガポーリアンと外 国人に、シンガポールは長期的に信頼できるものであるという自信を与えた」と述べました。

リー・シェンロン首相はこれまで、2021年までに実施予定の次期総選挙後に第4世代へ首相 交代をする意向を繰り返し見せていますが、昨年11月の党大会での首相の演説や、ラッフルズ 卿上陸200年、PAPが政権を掌握してから60年という節目の年を迎えることから、「今年、予 定を早めて総選挙を実施し、首相を交代するのでは!!」との観測が高まっています。

他方、この節目の年に、元 PAP 議員の重鎮が新党を結成する動きもあります。現地では「シンガポール初の与党分裂か?」と、一部でざわめきもあります。

現首相の父親で、「シンガポール建国の父」と呼ばれるリー・クアンユー初代首相は、強力なリーダーシップを発揮しシンガポールを飛躍的に発展させました。また、現首相も父親に劣らない指導力でシンガポールを導いてきました。シンガポールの首相は世襲ではないものの、結果として「リー一家」の強力な導きと共に歩んできた面もあり、首相交代により時代がどのように変化するのか予測する論調もあり、今年は政治の面でも動きが見られそうです。

4. 終わりに

現在でも、地名、ホテル・病院等の施設の多くに「ラッフルズ」の名が残り、ラッフルズ卿がシンガポールにとって影響の大きい人物であったことが窺われます。ラッフルズ卿の自由港

開設、都市作りは、200 年という歳月を経て、今もシンガポールの経済、都市計画の礎となっているように思います。

自由貿易体制と外資の取り込みをいち早く確立し、 その恩恵と共に発展してきたシンガポールですが、近 時は保護主義の台頭や米中貿易摩擦問題等、多くのマ イナス要素に直面しています。この「200 年」という 節目を契機に今年以降、様々な変化も予想されます。 今後、どのような対応、変化が起こるのか注目してい きたいと思います。

また、ラッフルズ卿上陸 200 年という節目をもって シンガポールの歴史や文化を学ぶ契機として、今後も 皆様へ様々な情報をお伝えできればと思っています。



シンガポールにある2つのラッフルズ像

駐在生活記

新観光名所誕生!?

今年2月27日から28日まで第2回米朝首脳会談が開催され、世界中の視線がベトナム・ハノイに注がれましたが、ご存知の通り、この歴史的会談の第1回目は、昨年6月12日に、ここシンガポールで開催されました。

政府観光局の発表では、会談開催月には前年同月比 11.2%増の150万人が同国を訪れたようです。この記念すべき会談を前に慌ただしい警備や準備も報じられ、会談日近辺はどのような状態になるのだろうか?と筆者も身構えていました。開催2週間前あたりから、イミグレーションが更に厳重になったという印象があり、また、地区によっては交通規制等もあり、若干、日常生活に影響が出た時間帯もあったようです。ただ、実際、筆者の職場界隈や生活圏界隈は?というと、全く支





両首脳が握手を交わした場所と記念のプレート

障がなく肩透かしを食った感もありました。シンガポール国内でも大きな混乱はなかったようです。国際会議が多く開かれ要人警護の経験豊富なシンガポールならではの結果だったように感じます。

さて、この会談会場となったのが、セントーサ島の高級ホテル「カペラホテル」。会談後、このホテルがちょっとした観光地になっているようです。両首脳が握手を交わした場所にはプレートが設置され、そのシーンを真似て握手をしながら記念写真を撮る観光客で賑わっているとか。ご多分に漏れず、筆者も早速そこを訪れて記念写真を撮ってきました。多くの木々に囲まれ、非常に静かでステイケーションにはもってこいの贅沢なホテルですが、筆者が同ホテルを訪れた際も、現地観光ガイドに案内された多くの観光客が我先にと記念写真を撮影していました!!

このカペラホテル、現地情報紙によると、会談場所の図書室への立ち入りは宿泊者限定ですが、両首脳が握手を交わした場所や中庭は自由に見学できるようです。

シンガポールへお越しの際は、是非、シンガポールの新名所?へ足を運んではいかがでしょうか! (筆者:本島清隆)



会談後、記念切手も発売

【参考文献】

シンガポール首相府 HP、シンガポール通産省 HP、シンガポール企業庁 HP、世界銀行 HP、ジェトロ・ビジネス短信、NNA、時事速報、「シンガポールを知るための 65 章」、日本経済新聞、西日本新聞

ここに記載されている情報は、情報提供を目的として作成したもので、何らかの勧誘を行うものではありません。当資料は信頼できると 思われる情報に基づいて作成しておりますが、その正確性や妥当性を保証するものではありません。ご利用にあたってはお客様ご自身で ご判断くださいますよう宜しくお願い申し上げます。